

人文地理学における一般性と固有性

谷内 達*

- I はじめに
- II 「一般性」に関する検討
- III 「固有性」に関する検討
- IV 一般性と固有性の関係

I はじめに

本稿は、人文地理学研究においてしばしば互いに対立・矛盾するとみなされてきた、いわゆる「一般性」（理論・法則・分析志向）と「固有性」（個性・総合・記述志向）との関係について検討し、両者が表裏一体の存在であり、相互補完的であることを述べようとするものである。

まず、「一般性」について、理論志向・法則志向であると自他共に認識されている自然科学においてさえも、特定の原理・法則ですべての現実の事象を説明できるということは期待されておらず、それらの有効性を確認するには一定の限定的な条件が前提となっていることを示す。

次いで「固有性」について、いわゆる地誌・地域研究あるいは特定地域の実態調査に基づく研究などにおいて、たとえ一般性を無視あるいは否定して固有性のみを追求しているつもりでも、何らかの意味での一般性に基づく考察が存在せざるを得ないことを示す。

そして最後に、生産・流通・消費の過程からの類推などによって、「一般性」と「固有性」との相互補完的關係について考察する。

* 東京大学人文地理学教室

II 「一般性」に関する検討

地理学、特に人文地理学は、さまざまな意味合いにおいて、「理論的」ではないといわれてきた。人文地理学の概説書・講座（たとえば手塚 1988: 185-190）においてしばしば言及されるいわゆるシェーファーの「例外主義」批判をはじめとして、「理論的」でないということが否定的な意味合いでとらえられてきたことは周知の通りである。そしてこのような「理論的でない」という批判における「理論的」であるということの意味が、たとえばかつて日本の地理学界において一時優勢であった「計量地理学イコール理論地理学」であるかのような風潮に見られるように、数理的・幾何学的モデルによる一般性・法則性という意味合いで認識されていたといえるであろう。

このような文脈において、「理論的」であることのイメージは、自然科学における理論・法則・分析志向のイメージに影響されていると思われる。しかし一見厳密かつ万能に見える自然科学の「理論」あるいは「法則」は、それぞれ一定の前提条件、いわゆるバウンダリー・コンディションの枠内でのみ、その有効性が期待され論じられることを見過ごしてはならない。言い換えれば、しかるべきバウンダリー・コンディションを明示しない限り、いかなる「理論」あるいは「法則」も検討に値しないのである。

たとえば高校レベルの初歩の物理で学習する物体の落下の現象は、きわめて単純な数式で表すことができるが、我々が身近な現象として観察できるような、「鉄の球はストーンと落ちるが羽毛はヒラヒラとゆっくり落ちる」という現象は、高校レベルの教科書のような単純な数式だけでは説明できない。これは、「空気抵抗を無視する」というバウンダリー・コンディションを前提としているからである。したがって高校の物理の先生は、空気抵抗の影響を排除した完全な真空状態における実験を見せなければならないことになる。すなわち、ここでの「理論」あるいは「法則」は、現実に観察される生の現象ではなく、一定の条件の下での限定的な状況あるいは過程にのみ適用されるものなのである。

また、いわゆる地球環境問題の代表的な事例として関心が持たれている地球温暖化問題においては、大気中の温室効果ガスの濃度がどれだけ上昇すれば気温がこれだけ上がるということが分かっている。この場合にも、大気中の温室効果ガスの濃度と気

温の変化との関係のみに限定し、気温の変化に影響する他の要因を排除するという前提に立っている。したがって、産業革命以来、おそらく大気中の温室効果ガスの濃度は世界的にはほぼ一貫して上昇してきたはずであるにもかかわらず、たとえば1940年代から1960年代にかけての時期のように、北半球の気温が低下傾向にあり、氷期がやってくるとジャーナリスティックに取り沙汰されたことについては説明できない。

以上の考察を参考にして、人文地理学において比較的「理論的」とみなされてきたと思われる理論あるいはモデルの一例として、周知のチューネンモデルを取上げてみよう。このモデルに対する人文地理学における反応には、当然のことながら「肯定的」なものもあるし、「批判的・否定的」なものもある。

「肯定的」な反応のうち、筆者にとって特に気になるのは、たとえばヨーロッパあるいは日本のような具体的な地域における現実の農業活動の実態に基づいて、何らかの意味での「地代」または「生産性」を代用するとみなされる生のデータを素朴に用いて、何とか見かけの「同心円構造」らしきものを示すことによって、チューネンモデルの成立あるいは正当性を「実証」しようとした「研究」が、少なくとも過去には現実に存在していたことである。しかしこれらの研究においては、その前提とされた現実の農業の実態に対して、自然条件は無論のこと、チューネンモデルが周到に前提としたようなバウンダリー・コンディションによって排除されていた数々の複雑な要因ないし影響が反映しているという厳然たる事実は、何ら考慮されていない²⁾。

一方、チューネンモデルに対する「批判的・否定的」な数々の論評の多くにおいても、たとえば、「チューネンモデルのような整然とした同心円的土地利用構造は現実にはどこにも見られない」「自然条件を無視している」「労働賃金の地域差を考慮していない」などのように、チューネンモデルの前提となるバウンダリー・コンディションを全く無視したのが見られる³⁾。

以上のような混乱あるいは誤解の原因は、バウンダリー・コンディションへの無理解に加えて、「一般性」あるいは「理論」を、諸要素が関連し合うメカニズムとしてではなく、最終的に実現した実態と直接結び付けてその是非を論ずるという、「一般性」に対する支持・不支持に共通する、きわめて単純かつ素朴な思考方法にあるといえる。人文地理学がいわゆるフィールド・サイエンスを自認し、研究対象地域の生の実態に

即して分析し考察するという伝統はそれなりに最大限尊重すべきではあるが、「一般性」に結び付けて論じる際には、少なくとも自然科学におけるような「一般性」という意味では、バウンダリー・コンディションに対する十分な理解と、それに基づく分析・考察が必要であろう。

III 「固有性」に関する検討

いわゆる「地誌」・「地域研究」や特定地域の実態調査に基づく研究の多く（以下便宜的に「地誌的研究」と記す）は、上記のような意味での「一般性」に対して、善かれ悪しかれ、おそらく最も対照的なものであり、「固有性」追求の最たるものとして位置付けられていると考えてよいであろう。すなわち、地誌的研究は、何らかの意味での「一般性」志向を目指す立場からは科学的でないとの消極的評価につねに曝されながらも、現実には、積極的にせよ消極的にせよ、単純な意味での「一般性」志向に対するアンチテーゼとしての一定の役割を果たしてきたといえる。

これらの地誌的研究を「一般性」志向に対するアンチテーゼとして積極的に位置付ける動機としては、たまたま欧米の一部の地域の事例で観察された事実のみに基づいて安易に一般化された「理論」の押付けに対する反発、あるいは、いわゆる数式的・幾何学的モデルでは評価し難い文化的・歴史的な要素の強調など、さまざまな根拠が考えられる。どちらかといえば地誌的研究と目される分野での活動が多かった筆者にとって、このような事情は、少なくとも心情的には、十分に理解できる。

しかし、これらを前提にした上で、ここではあえて、個別地域の特殊性あるいはいわゆる「地域性」ないし「固有性」を重視する立場に立った場合でさえも、何らかの意味での「一般性」とはけっして無縁ではないことを、以下のような筆者の過去の記述の引用によって示唆させて頂きたい。

筆者は、かつてパプアニューギニアに関する一般的な概説書を執筆したことがある。その「まえがき」の一部は次の通りである。

「この本は、パプアニューギニアの社会と経済についての概略をまとめてみたものである。この本で描かれているパプアニューギニアは、『未開野蛮の秘境』でもなければ、

『物質文明に毒されない最後の楽園』でもなく、ごくあたりまえの国の一つにすぎない。『日本人はタロイモを食べる』といわれれば、怒る人がいるかもしれない。『タロイモ』ということばに、『南洋の土人の原始的な食べ物』というイメージがつきまとうからであろうか。日本人が文明人であることを示すかのように、我々の食べるタロイモは、『さといも』と呼ばれる。『ニューギニア』ということばにも、すでに一定のイメージがつきまわっている。そのイメージに合致する題材だけを選べば、『ニューギニア』についての面白い読み物ができるであろう。しかし、自動車が走り、スーパーマーケットや大学のある『ニューギニア』では、いわば『絵』にならない。この本は、いわゆる『ニューギニア』についての本ではない。絵にならない方の、現実にある、パプアニューギニアという普通の国についての本である。したがって、この本には、『土人』も『原住民』も登場しない。登場するのは、パプアニューギニアという国の国民たる、パプアニューギニア人である。目次には、いささか百科事典風の、ありきたりの項目がならんでいる。これらの多くは、そのまま、ほかの国についての本にも使えるであろう。この本の主要な意図は、パプアニューギニアを、特定の先入観を極力排して、ほかの国と比較できるような共通の枠組で記述することである。そうすることによって、かえってその国の基本的な特色が浮かび上がると期待されるからである」(谷内 1982: i-ii)⁴⁾。

また筆者は、日本の三大都市圏に関する、どちらかといえば「固有性」志向といえる本の結びの一部として、大都市圏の客観的実態における一般性・固有性について、大都市圏研究の枠組・視点に関連させて、次のように述べたことがある。

「第1に、客観的実態における一般性・固有性は、それ自体としては客観的に存在しているわけではなく、一般性・固有性のそれぞれを見出だそうとする研究の枠組・視点によってのみ認識されると考えられる。たとえば、そもそも我々のテーマである『大都市圏』それ自体も、初めから客観的に存在しているわけではなく、客観的実態として明白に存在するといえるのは、個々の個人・家族・事業所・地方自治体等である。それらを一定の空間的あるいは機能的な観点から一括して、『大都市圏』として認識することによって、初めて『大都市圏』が研究の上で存在することになるのである。また同様に、『都心部・中心市』や『郊外・周辺地域』等の用語も、我々の研究上の認識の産物であり、すでにこれらの用語を用いることは、いささか大仰にいうならば、暗黙

のうちに、これらの用語の背後にある一定の空間的あるいは機能的な大都市圏モデルを仮説として前提していることになる。また少なくともそのような素朴な意味で、三大都市圏の一般性を認識しているといえる。第2に、いうまでもないことではあるが、一般性（共通点）と固有性（相違点）とは、互いに対立する概念ではなく、いわばコインの両面である。すなわち一般性の認識なくしては固有性は認識できないし、固有性の認識なくしては一般性は認識できない。その意味では、いわゆる法則追求型研究と個性記述型研究とを対立的にとらえる見方は現実的ではなく、両者の関係は相互補完的である」（高橋・谷内 1994: 239-240）。

IV 一般性と固有性との関係

一般性と固有性との関係は、人間そのものにたとえることもできる。個々の人間は、顔立ち・体格・性格などがそれぞれ微妙に異なるという意味で、「個性」と呼ばれる固有性を持っている。しかし同時に、目が二つ、鼻が一つ、肋骨が何本・・・というように、医学的・生理的には共通の要素を持つことはいうまでもないし、「個性」の要素である顔立ち・体格・性格なども、一定の平均的な物差しとの比較によって相対的に認識される。

また、一般性と固有性との関係は、生産から流通を経て消費に至る過程において、「川下」ほど固有性が強いのに対して、「川上」ほど一般性が強くなることから類推して考えることもできる。「川下」の小売段階での最終消費財は、機能・サイズ・デザインなどさまざまな点で多種多様であり、固有性が強いといえるであろう。しかし「川上」に向かうほど、これらの多種多様な商品を生産するための素材・部品や、工作機械・製造方法などの製造過程などの点で、一般性が増してゆくといえるであろう。

このような考え方を人文地理学研究に置き換えてみると、パプアニューギニアや東京・名古屋・京阪神の各大都市圏の特徴に関する記述のような、固有性指向の「地誌」・「地域研究」的な知的生産物は、社会的に有用な最終消費財的なものとして位置付けることができる。これに対して、チューネンモデルなどのような一般性指向の理論・モデルや大都市圏のような概念・分析枠組は、素材・部品や工作機械などのように、生

産財・中間財的なものとして位置付けることができる。したがって、この意味でも一般性と固有性との関係は相互補完的であり、生産財と最終消費財とのどちらが大切かという議論は無意味なものとなる。

人文地理学においては、不幸にして「一般性」と「固有性」とが余りにも乖離したものとして認識され、両者の補完的かつ密接不可分な関係については看過されてきたのではないと思われる。特に「固有性」に立脚した研究に従事する地理学研究者にとっては、「固有性」を重視するためにこそかえって不可欠なものとして、また、より多くの人文地理学研究者の知的共有物すなわち知的リテラシーとして、「一般性」に対して、より一層の関心が向けられることが期待される。

注

- 1) 本稿は、人文地理学会大会における特別研究発表（1999年11月、奈良大学）の内容を加筆修正したものである。
- 2) たとえば除野（1974: 102-104）は都道府県別の面積当たり農産物生産額の生データを用いた。また、坂本（1977: 115-116, 1985: 21-22）などのように、概説書でもこのような既存研究の例がしばしば紹介されているが、農業の生の実態を直接扱ったことによる問題点には明確には言及していない。
- 3) 坂本（1977: 116-117）はチューネンモデルの「二・三の問題点」として、運送費以外の要因に言及している。おそらく、現実の農業の実態が単純にはチューネンモデル通りにならないことへの注意を喚起する意図からであろうが、特定の要因（運送費）のみに限定したことが誤りであるかのような誤解を生ずる恐れがある。
- 4) 各章・節のタイトルは次の通りであり（カッコ内は節）、一部の節を除いて、なるべく一般的な項目を立てるように努めた。

国土（沿革、国土の自然的基盤）

国民（人口、言語と宗教、教育と保健、村落社会の伝統）

経済の枠組（経済の成長と構造、労働力、貿易と国際収支）

農業（農園と農家、主要商品作物、村落農業）

資源開発（林業と水産業、鉱業、工業と電力）

交通（航空と海運、道路と自動車、ハイランド道路）

村落と都市（村落の生活、地域格差、人口移動と都市化）

開発政策（開発の目標、財政と開発政策）

文献

- 坂本英夫 1977. 農牧業. 木村辰男・坂本英夫・高橋 正編『現代地理学の基礎』113-129. 大明堂.
- 坂本英夫 1985. 農牧業. 坂本英夫・浜谷正人編『最近の地理学』11-34. 大明堂.
- 高橋伸夫・谷内 達編 1994. 『日本の三大都市圏 その変容と将来像』古今書院.
- 谷内 達 1982. 『パプアニューギニアの社会と経済』アジア経済研究所.
- 手塚 章 1988. 地理学の革新と伝統. 中村和郎・高橋伸夫編『地理学への招待』(地理学講座 1) 168-191. 古今書院.
- 除野信道 1974. 『新体系経済地理学』古今書院.